

1 (7) 史料・考古

「史料・考古」計画推進部会長 蝦名裕一

(東北大学災害科学国際研究所)

副部会長 村田泰輔

(奈良文化財研究所)

日本列島において近代的な観測機器による地震観測が開始されたのは明治時代前期以降であり、それ以前に発生した地震・火山噴火現象、またはそれらによる災害に関する知見を得るためには、史料や考古資料に基づく地震や火山噴火のデータが必要不可欠である。そのため、日本における地震火山関連史料の収集・編纂とそれらを用いた地震や火山噴火の研究は、明治時代後期より実施されており、各種の地震史料集や火山噴火史料集が刊行されている。

しかし、史料や考古資料に基づく地震火山関連のデータは、当時の人間の感覚による記録や地中に残された痕跡に基づくものであり、近代的な観測機器を用いた地震・火山の観測データによる調査分析に直結させて活用することは困難である。そこで重要になってくるのが、歴史学の手法を用いた史料とその記述の正確な分析・解読や、地質学的手法を活用した考古遺跡における災害痕跡の分析といった、歴史学や考古学の専門的見地からのアプローチである。また、今日高まりつつある災害・防災へのオープンサイエンスの一環として、地震・火山噴火関連の史料データ・考古データのデータベースの構築や統合とともに、これらのデータを活用した新たな研究手法の検討や利用も重要な研究課題である。

このような新たな研究への取り組みは、史料や考古資料に関する読解や分析が十分とは言えなかった従来の研究手法を改善するとともに、それぞれの分野の学術研究に裏打ちされた精度と確度の高い文理融合による学際研究を目指すものである。この取り組みによって、かつては地震学や火山学の分野から信頼性が問題視されてきた史料・考古データや、それらに基づく研究成果について、これまで以上の信頼性を確保できると考える。

1. 地震・火山現象の解明のための研究

(1) 史料・考古・地形・地質データ等の収集と解析・統合

ア. 史料の収集・分析とデータベース化

○史料による近代以前の地震・火山活動の調査・分析とその公開

前計画に引き続き、地震史料集テキストデータベースの原典による史料校訂、およびデータ修正の作業を進めた。これまで別々に行っていた史料校訂とデータ修正を一体の作業として行うこととし、増訂3および新収3の史料校訂・データ修正を進めた(東京大学史料編纂所[課題番号: UTH_01])。

史料と史料に登場する地名の関係を、Web GISベースのシステムを介して可視化(地図上に表示)するために、自然言語処理を専門とする情報工学研究者との連携により、新収3・4・4別を対象に、学習データの追加、および実践的な自動地名付与を行い、これまで以上の性能を得た。F値(=適合率×再現率)の評価は約0.775(令和4年度)から0.839

に向上し、人手で修正したデータを追加して学習させた場合は、0.840へと改善がみられた（東京大学史料編纂所[課題番号：UTH_01]）。

①「宇和島伊達家文書」（宇和島伊達文化保存会）のうち『国元日記』（原題：大控、日記ほか）の分析から、日向灘を震源とする歴史地震の分析時に、宇和島の記録の有無は、震源判断の一助となり得る可能性があることが判明した。②「小松藩会所日記」「高鴨神社日次記録」（西条市立小松温芳図書館）を調査し、「高鴨神社日次記録」からは、伊予での地震記事のほか、各地の地震伝聞情報などが得られた。③「荒木（登志夫）家文書」（熊本県立図書館）のうち『日記 大地震有之等諸事書付』は、昨年度調査した「東海道地震記録」を記した坂本淳蔵と同行していた人物が嘉永七年十一月四日の東海地震後の東海道の様子を記録したもので、同じ被害状況を別人が見た記録として比較が可能である。④阿蘇大宮司家文書『日記』（熊本大学附属図書館）は、19世紀前半における阿蘇山の火山活動履歴構築の一助となる史料であることが判明した。⑤奈良県吉野山の桜本坊文書を調査し、家光・家綱期の老中松平乗寿らが寺社・公家とやりとりした書状の控のうちに、慶安二年六月二十一日（1649年7月30日）の江戸大地震に関する記述を発見した。⑥昨年度に引き続き「佐伯藩郡方町方御用日記」（佐伯市歴史資料館）の地震記事を確認した。⑦「伊達家文書」（仙台市博物館）を調査し、これまで未校訂であった『大日本地震史料』の該当部分の校訂を実施した。⑧「高鍋城明和六年大地震破損覚書絵図」（高鍋町歴史総合資料館）および「高鍋城図」（東京大学史料編纂所）により、明和六年七月二十八日（1769年8月29日）の日向灘地震における高鍋城の被害について検討した。⑨「立花家文書」（柳川古文書館）、⑩都城島津家文書「山田有長雑集」（都城島津邸）等を調査した。⑪「浦日記」（山口県文書館所蔵毛利家文庫）について、史料の画像公開と記事の分析を行った。既刊史料集に示された記主の所在地（震動の記録された場所）の誤りと未採録の地震事例が多数判明した。⑫所蔵のCaptains' logs, including BLOSSOM（The National Archives, UK）等の分析によって、小笠原諸島父島での1826年の津波とされる事象には気象災害の可能性が含まれていることが判明した。「小笠原島日記」（国立公文書館）等の史料の分析と数値計算によって、小笠原諸島父島に1854年安政東海・南海地震による津波が到達した時刻に関する史料の記述は概ね正しく、数値計算で求められる津波の振幅は史実を再現できることが判明した（東京大学史料編纂所[課題番号：UTH_01]）。

○東北地方を中心とする歴史災害の文献・絵図史料収集および地形復原による分析

1611年慶長奥州地震津波をめぐって、評価が分かれている次の点について検討した。①地震規模について、『言緒卿記』の作者の山科言緒が「大地震」と記述する例を検討した結果、山科言緒の「大地震」は、一定度の身の危険がともなう震度4以上とするのが妥当である。②1611年慶長奥州地震津波の震源・波源を千島海溝とする論拠のひとつが、地震発生と津波到達時刻に4時間の差があるという指摘である。しかし、そもそも、地震発生と津波の到達時刻に時間差があったことを明記した史料は存在しておらず、気仙町の『古新手鑑』などは地震まもなく津波が到達したという記述をしている。ゆえに、地震発生と津波到達時刻の不自然な時間差を設定する必要は無い（東北大学災害科学国際研究所[課題番号：IRID01]）。

○日本海沿岸地域を中心とした地震・火山噴火関連災害の解明のための史料収集と解析

日本海沿岸地域を中心とした各地の史料保存機関に所蔵される史資料の調査と分析、既刊の地震・火山噴火史料集に所収される史料の原本調査に基づく校訂作業を実施した。

(1) 1361年南海トラフ地震の東海地震に関連して、三河国渥美郡の常光寺(愛知県田原市)伝来の『常光寺王代記并年代記』の康安元年地震記事「自六月一日、迄廿一日、大地震、地破」の出典について史料学的に検討した。その結果、14~15世紀前半の記事は著者樹王が遠江国浜松庄普濟寺(静岡県浜松市)で得た出典に基づいており、当該記事の地震は遠江でおきた可能性が高い。(2) 現在の新潟市西区を描いた近世絵図「西川筋道上山付近絵図(断簡3点)」(新潟市歴史博物館所蔵)について現地比定を行い、新田の「亥砂入」の範囲が海岸砂丘と氾濫原との境界域に位置することを明らかにした。その形状が砂丘列に平行して細長く伸びること(2024年能登半島地震による被災地と同じ)などから、液状化現象(噴砂)により砂入として年貢減免地を示すために作成され、その地震は年貢減免される亥年の前年戌年の1802年佐渡小木地震の可能性がある。(3) 1828年のシーボルト台風・越後三条地震の被害情報などを記す史料の写本が各地に残ることについて、新たに翻刻分析した越後国古志郡種苧原村(現長岡市山古志)庄屋坂牧家の写本2点を含む4点の写本の内容を比較検討することにより、伝写の系統や原典を探り、台風・地震等の複合災害に対する「災害知」集積の一環として書写された側面があったことを示した。(4) 1833年庄内沖地震における能登半島の被害を記した「秀藤日記」の記事について原本(石川県珠洲市飯田、春日神社所蔵「葛原秀藤日記」)コピーにより確認したところ、『新収日本地震史料 補遺続』等に記載される輪島の津波被害者数は100人でなく200人であった。(5) 2024年能登半島地震により新潟市西区で被害を受けたかつて潟のあった地域を知るため、近世に作成された坂井郷亀絵図と享保4年(1719)北場・亀貝・小新野手場書上絵図(新潟市文書館所蔵亀貝・坂井家文書)を調査しトレース図を作成した。また『西蒲原郡全図』(1914年)について、新川(悪水を海に流す堀割、1820年通水)が描かれる以前の近世絵図には、二枚目潟などの名称が記され、潟名のない潟が白鳥潟であることを確認した(新潟大学[課題番号:NGT_01])。

○史料の可視化から解明する南海トラフ巨大歴史地震像

三重県、愛知県、静岡県、和歌山県を中心に地方史・郷土史等の史料収集を行うとともにそれらの情報についてGISに入力を行った。昭和南海地震では紀伊半島南部で、震源域に近いにもかかわらず当時の体験談等を読むと軟弱地盤地域を除いて家屋倒壊もなく、家の中も大した被害になっていないことがわかった。紀伊半島南部の被害はほとんどが津波によるもので揺れによる被害はほとんどない。安政南海地震でも同じようなことが言えることがわかった。これは東南海地震での被害の状況とは大きく異なる。なぜ揺れが小さく津波が大きいのか、今後検討が必要である。内閣府の予測震度分布をみても和歌山県南部は震度6強~7が想定されているが、南海地震での和歌山県南部では揺れによる被害よりも津波による被害が重要になる可能性がある(名古屋大学[課題番号:NGY_01])。

令和5年度以前から実施している『大沢家本願寺関係文書』(安政東海・南海地震に関する西本願寺関係者の記録)と『違変記』(1790-1855年の地震、火山噴火、気象災害、異常現象、事件の記録の集成。福岡藩士の編纂物)の解読を継続し、新たに『鳥羽御城石

垣惣躰高サ式尺築足一件他』の解説を開始した。新出史料『三戸御与力石井綱盈要録』（1843-1868年の南部家の代官所与力を務めた石井綱盈の公私留書。1856年安政十勝沖地震の記録を含む）を入手した（名古屋大学[課題番号：NGY_01]）。

○歴史地震・噴火に関する分野横断的なデータベースとコミュニティカタログの構築

地震史料集テキストデータベースにおいて、収録された史料全体について、過去の収録作業における年月日誤りや、文字の変換誤りを修正した。データベースに実装した「問い合わせ」機能が有効であった。関東地方で発生した地震に関連する史料について、被害や有感地点を推定しGISデータ化を進めた。可視化には「れきちず」や「『日本歴史地名大系』地名項目データセット」など最新の情報基盤を活用した（図1）。考古データ（「歴史災害痕跡データベース」）との連携のため、アイコンの共通化を検討した。1729年能登半島の地震の際の有感地震数について検討した。1830年京都地震の際の、上賀茂神社での被害や神社の対応について詳細に分析した。また、歴史地震の震度判定を生成AIによって半自動化する試みを行った。震度判定表を生成AIに学習させ、それをもとに入力した地震史料テキストから震度判定させ、震度のほか判定の信頼度や根拠を出力させることができた。既刊の地震史料集の中間的・根拠データである写真帳（東京大学地震研究所の共同利用の対象）のデジタル化を進めた（東京大学地震火山史料連携研究機構[課題番号：HMEV01]）。

○研究コミュニティの構築・教育・社会への普及

「東海道地震記録」は上記の調査の成果をふまえて、熊本博物館で常設展示されることになった（2025年2月～）。調査・研究によって、地域に所蔵される史料の存在とその内容が広く紹介されるに至ったことは、災害に関する市民の理解や防災への意識を高めるうえでもきわめて重要な成果である（東京大学史料編纂所[課題番号：UTH_01]）。

災害時における文化遺産防災として、各地の文化遺産の位置情報と災害情報を重ねた文化遺産防災マップについて、2024年1月能登半島地震の際にこれを活用した文化遺産の被災推定を実施した（東北大学災害科学国際研究所[課題番号：IRID01]）。

2024年11月10日に第12回歴史地震史料研究会をオンラインにて開催し、本課題研究者メンバーを中心とした歴史学者7人・地理学者2人・考古学者1人・地震学者1人による研究発表・討議を行った（参加者33人）（新潟大学[課題番号：NGT_01]）。

兵庫県立大学・名古屋大学・他のメンバー共同による「減災古文書研究会」を組織して令和6年度の研究活動を実施した。防災関係行事における出展・ワークショップ3件（名古屋大学減災連携研究センター夏休みスペシャル減災教室（名古屋市）・ぼうさいこくたい2024（熊本市）・あまおだ減災フェス（兵庫県尼崎市））においてかわら版『諸国大地震大津波末代噺』を利用したすごろくゲームを実施した。その際、ワークショップ実施の前後で質問紙調査を行うことにより学習効果を測定し、統合指標「災害に対する興味関心と知識」が向上したことが明らかになった。減災古文書研究会のインスタグラムを新たに開設し、研究成果の社会還元を推進した（名古屋大学[課題番号：NGY_01]）。

イ. 考古データの収集・集成と分析

○考古・地質・歴史資料による地形発達と地質表層部-深層部応答にみる災害発生メカニズム分析と歴史災害痕跡データベースの拡充構築

奈良文化財研究所が有する「全国遺跡報告総覧」 (<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>) に掲載される全国131,972件の発掘調査報告を精査し、地震痕跡の記載（キーワード：地震・断層・液状化）がある1,670件の情報を抽出し、そこに地震痕跡の検出調査地点の緯度・経度情報、災害痕跡種別、地震発生想定時期等を付記した「全国大規模地震痕跡データセット」を構築し、データ活用が容易となるようCSV形式で一般公開 (<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/cultural-data-repository/75>) を始めた（図2，図3，奈良文化財研究所[課題番号：NAB_01]）。

東京大学地震火山史料連携機構（地震研究所・史料編纂所）の有する歴史資料データベースとの統合検索を行うために「歴史災害痕跡データベース」 (<https://hdegis.nabunken.go.jp/>) に実装しているAPI機能の改修・拡充を行った。「歴史災害痕跡データベース」へのデータ入力インターフェースの試験運用を始めた。一部入力方法に課題があるが、次年度には通常運用を進められる段階まで到達した（奈良文化財研究所[課題番号：NAB_01]）。

BIM/CIM技術の導入を進め、地質情報の基盤となるボーリング・コアや、発掘調査で行われる層相記載について、デジタル情報化し空間情報システムとして一元的に取り扱うために、初期的な調査フローの構築を行った。西日本における「地殻活動の機動観測を通じた内陸地震に伴う災害の軽減に関する総合的研究(DPRI10)」の、光リモートセンシングによる表層地質の揺れやすさ観測と、発掘調査で検出した地震痕跡との相関性についての検証を進めた（奈良文化財研究所[課題番号：NAB_01]）。

○考古学による弥生時代に発生した津波災害の検討

仙台市沓形遺跡で判明した弥生中期中葉（2000 calBP）の大規模な三陸地震津波が発生する以前の弥生時代の集落遺跡の消長分析を行った。その結果、広域的な一斉衰退現象（廃絶を含む）が中期初頭のとくに三陸沿岸～大崎平野で顕著で確認できた（新潟大学[課題番号：NGT_01]）。

これまでの課題と今後の展望

令和6年度においては、地震・火山現象に関係する史料の調査・収集を全国各地で実施、それらの情報を活用しながら地震・火山現象の詳細な事例研究や既往研究に対する史料の見地からの見直しを進めた。また、データベースの分野では、地震史料集テキストデータベースのブラッシュアップおよびGISデータ化、東南海地震に関する史料情報のGIS入力による南海トラフ地震の個別分析を進めた。特に、今年度は考古調査による地震痕跡の検出調査地点の緯度・経度情報、災害痕跡種別、地震発生想定時期等を付記した「全国大規模地震痕跡データセット」を構築し、これを令和7年1月24日より一般公開した。あわせて、当部会の課題代表者による研究会を実施し、本年度の成果を共有するとともに、整備されつつあるデータベースを利活用した新たな研究展開について協議した。

今年度の史料研究の活動から、既往研究で定説が固まりつつある事例であっても、精緻な分析から見直すことで、修正点や新たな実相が浮かび上がっており、今後もさらな

る史料の収集・分析を展開することが継続的な課題である。一方、考古資料の調査研究からは、特に地震の災害痕跡の分布から、これまでに認識されなかった表層地質の揺れやすさの粗密が「見える化」した。これは地殻活動が引き起こす災害発生メカニズムを明らかにするだけでなく、現在の私たちの社会インフラを評価していく重要な情報基盤となる。今後は、地震のみならず火山噴火、さらにそれらによって引き起こされる2次災害以降の多様な災害について、継続的に情報を収集・集成していくことが必要である。また、各種データベースの一般公開や情報の拡充が進む一方で、これらを活用した新たな研究はまだ十分には展開できていない。データベースを活用した研究について、当部会の史料分析はもちろんながら、今後は他部会とも連携した研究の展開を模索することにした。

成果リスト

・論文・報告書等

- 榎原雅治, 2024, 東海の災害・環境と交通路, 杉山一弥編『東海の中世3室町幕府と東海の守護』, 吉川弘文館, 192-219.
- 蝦名裕一, 2024, 元和二年(1616)仙台地震における津波被害はあったのか?, 歴史地震39, 187-202.
- 原直史, 2024, 文政十一(一八二八)年複合災害の様相—豪雨・飢饉・台風・地震—, 災害・復興と資料, 16, 1-13.
- 原直史, 2024, 1828文政11年複合災害の情報伝播—越後国を中心に—, 第12回歴史地震史料研究会講演要旨集, 28-30.
- 原田和彦, 2024, 安政江戸地震における松代藩邸の被害, 災害・復興と資料, 16, 88-98.
- 原田和彦, 2024, 前近代における長野県大北地域の地震活動, 第41回歴史地震研究会(木曾御嶽大会)講演要旨集, 3-3.
- 原田和彦, 2024, 江戸時代における長野県北部の地震活動, 第12回歴史地震史料研究会講演要旨集, 22-23.
- 林晃弘・水野嶺, 2025, 熊本博物館所蔵「東海道地震記録」, 東京大学史料編纂所研究紀要, 35.
- 堀健彦・片桐昭彦, 2024, 近世期における新潟市西区を描いた絵図と2024年能登半島地震による被害, 第12回歴史地震史料研究会講演要旨集, 4-5.
- 加納靖之, 2025, 歴史地震研究におけるデータのオープン化の現状, 国立歴史民俗博物館研究報告, 印刷中.
- 加納靖之, 2025, 歴史地震IDについて, 国立歴史民俗博物館研究報告, 印刷中.
- 片桐昭彦, 2024, 災害記録としての『新選和漢合図』写本, 災害・復興と資料, 16, 59-67.
- 片桐昭彦, 2024, 年代記の地震記事と出典—『常光寺年代記』の康安元年地震記事—, 第12回歴史地震史料研究会講演要旨集, 19-21.
- 北村昌卓, 弘田尚也, 浦川豪, 平井敬, 2025, 劣化した石碑の簡易な判読技術の開発と市民参加型石碑データベースの構築に向けた検討, 中部「歴史地震」研究年報, Vol.13.
- 村田泰輔, 西口顕一, 関口洋美, 2024, 歴史災害痕跡データベースの表示デザインの研究. 奈文研論叢5, pp.1-14.

- 水野 嶺, 2025, 十九世紀前半肥後国下の地震—中小地震記録の集積と分析—, 月刊地球, Vol. 47, No. 1, 6-14.
- 小野映介, 2024, 令和6年能登半島地震によって生じた越後平野における地盤災害, 2024年日本地理学会春季学術大会要旨集, 57-57, DOI:10.14866/ajg.2024s.0_57.
- 小野映介, 平安京左京南部における地形環境変遷, 災害・復興と資料, 16, 30-37.
- 小野映介・佐藤善輝, 2024, 地形環境史研究—地理学と考古学・歴史学の接点, 古今書院, 1-183.
- 大邑潤三, 2025, 地震史料のGISデータ化の意義と課題, 月刊地球, 184-194.
- 齋藤瑞穂・鈴木正博, 2024, 先史三陸地震津波概論—縄文時代篇—, 災害・復興と資料, 16, 1-29.
- 齋藤瑞穂・鈴木正博, 2024, 弥生三陸地震津波研究—弥生時代中期中葉以前の環境変動—, 第12回歴史地震史料研究会講演要旨集, 12-15.
- 杉森玲子, 2025, 小笠原諸島父島における「1826年1月の津波」の再検討, 月刊地球, Vol. 47, No. 1, 15-24.
- 柳井七海, 福島栄寿, 北村昌卓, 平井敬, 2025, 新聞の比較から見る報道管制—東南海地震の報道を例に—, 中部「歴史地震」研究年報, Vol. 13.
- 矢田俊文, 2024, 八戸藩における1843年・1856年の地震による津波被害, 災害・復興と資料, 16, 68-75.
- 矢田俊文, 2024, 新潟県西蒲原郡の地図と渦—20世紀初頭—, 第12回歴史地震史料研究会講演要旨集, 6-8.

・学会・シンポジウム等での発表

- 蝦名裕一, 2024, 文化遺産防災マップによる文化遺産の災害リスク評価について, JpGU Meeting 2024 防災地球科学(DS), HDS10-P05
- 原直史, 2024, 1828文政11年複合災害の情報伝播—越後国を中心に—, 第12回歴史地震史料研究会, 10.
- 原田和彦, 2024, 前近代における長野県大北地域の地震活動, 第41回歴史地震研究会(木曾御嶽大会), 0-03.
- 原田和彦, 2024, 江戸時代における長野県北部の地震活動, 第12回歴史地震史料研究会, 8.
- 堀健彦・片桐昭彦, 2024, 近世期における新潟市西区を描いた絵図と2024年能登半島地震による被害, 第12回歴史地震史料研究会, 2.
- 加納靖之・大邑潤三, 2024, 『新収日本地震史料』の編纂時資料のデジタル化, 第41回歴史地震研究会, P-04.
- Kano, Y., M. Ebara, and K. Satake, 2024, Damages and Aftershock Sequence of the August 1, 1729 Earthquake Occurred in the Noto Peninsula, AOGS2024, SE02-A013.
- 加納靖之, 2024, 1729年能登半島の地震の際の被害と有感地震数, 日本地球惑星科学連合2024年大会, MIS17-P03.
- 片桐昭彦, 2024, 歴史地震記録としての年代記, 巨大地震・巨大津波に関する国際研究集会—2004年スマトラ・アンダマン地震から20年間の進歩と今後の展望—, 9-2.
- 片桐昭彦, 2024, 前近代における地震と史料, 日本地震学会強震動委員会第43回研究会.
- 片桐昭彦, 2024, 年代記の地震記事と出典—『常光寺年代記』の康安元年地震記事—, 第12回歴史地震史料研究会, 7.
- 北村昌卓(平井敬), 2024, 減災古文書研究会の活動報告, 第5回関西歴史災害研究懇談会

- 楠本 聡・今井健太郎・杉森玲子・堀 高峰, 小笠原諸島父島の1854年安政東海・南海地震津波, 日本地震学会秋季大会, S17-09
- 森脇美沙(平井敬), 2024, 歴史フェスにおける減災古文書研究会の活動報告, 第24回中部「歴史地震」研究懇談会.
- 水野 嶺・加納靖之・榎原雅治, 2024, 日向灘を震央とする近世の地震, 日本地震学会秋季大会, S23P-13
- 村田泰輔, 2024, 考古・歴史資料による潜在したハザードの見える化～今ある情報を見直し, 私たちの将来の安心・安全へ～. 阪神・淡路大震災30年事業令和6年度 防災特別講演会(防災エキスパート研修会), 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター主催
- 中村元, 2024, 1964年新潟地震とその復興の歴史的意味—「開発の時代」における意味と課題を考える—, 新潟市地震60年・新潟県中越地震20周年公開シンポジウム「そなえる・すくう・たちあがる」, 6.
- 小野映介, 2024, 令和6年能登半島地震によって生じた越後平野における地盤災害, 2024年日本地理学会春季学術大会, 731, DOI:10.14866/ajg.2024s.0_57
- 大邑潤三・北本朝展・加納靖之・橋本雄太, 2024, 対話型生成AIを用いた歴史地震の震度判定の試み, 日本地震学会2024年度秋季大会, S10-08.
- 大邑潤三・加納靖之, 2024, 賀茂別雷神社「社記仮附」にみられる文政京都地震の余震記録の検討, 第41回歴史地震研究会, 0-25.
- 大邑潤三・加納靖之・岩橋清美・草山菜摘・濱野未来・北井礼三郎・山本宗尚・玉澤春史・堀川晴央, 2024, 1830年文政京都地震による賀茂別雷神社の被害と震度について, 日本地球惑星科学連合2024年大会, MIS17-P05.
- 大邑潤三, 地震被害のマルチスケール要因分析, 日本地球惑星科学連合2024年大会, MIS17-P06.
- 齋藤瑞穂・鈴木正博, 2024, 弥生三陸地震津波研究—弥生時代中期中葉以前の環境変動—, 第12回歴史地震史料研究会, 5.
- 杉森玲子, 2024, 小笠原諸島父島における「1826年の津波」の再検討, 日本地球惑星科学連合2024年大会, MIS17-03
- 杉森玲子, 2024, 小笠原諸島を襲った1854年の津波, 巨大地震・巨大津波に関する国際研究集会—2004年スマトラ・アンダマン地震から20年間の進歩と今後の展望—
- 杉森玲子, 2024, 1769年明和日向灘地震における高鍋城の被害, 第12回歴史地震史料研究会
- 山中佳子, 2024, GIS (e-コミマップ) を用いた歴史地震史料整理の重要性, 日本地球惑星科学連合大会, MIS17-06.
- 山中佳子, 2024, 歴史史料の可視化で南海トラフ地震を検討する, 第5回関西歴史災害研究懇談会
- 柳井七海, 福島栄寿, 北村昌卓, 平井敬, 2024, 戦時下の新聞は昭和東南海地震をいかに伝えたか, 第41回歴史地震研究会(木曾御嶽大会).
- 矢田俊文, 2024, 新潟県西蒲原郡の地図と潟—20世紀初頭—, 第12回歴史地震史料研究会, 3.

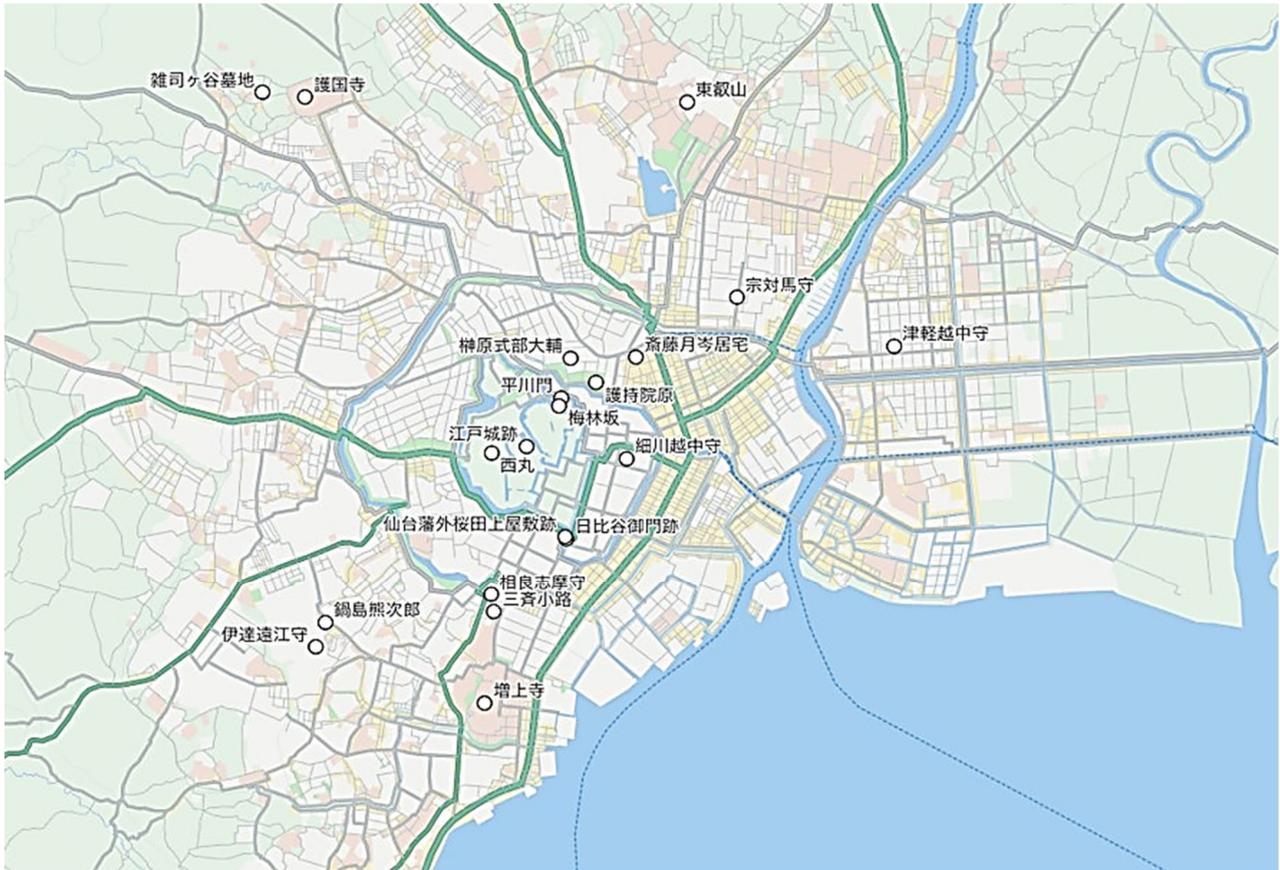


図1. 「れきちず」上に表示した関東地方の地震史料の記録地点（東京大学地震火山史料連携研究機構[課題番号：HMEV01]）

データセットの概要①【データセットの構成内容】

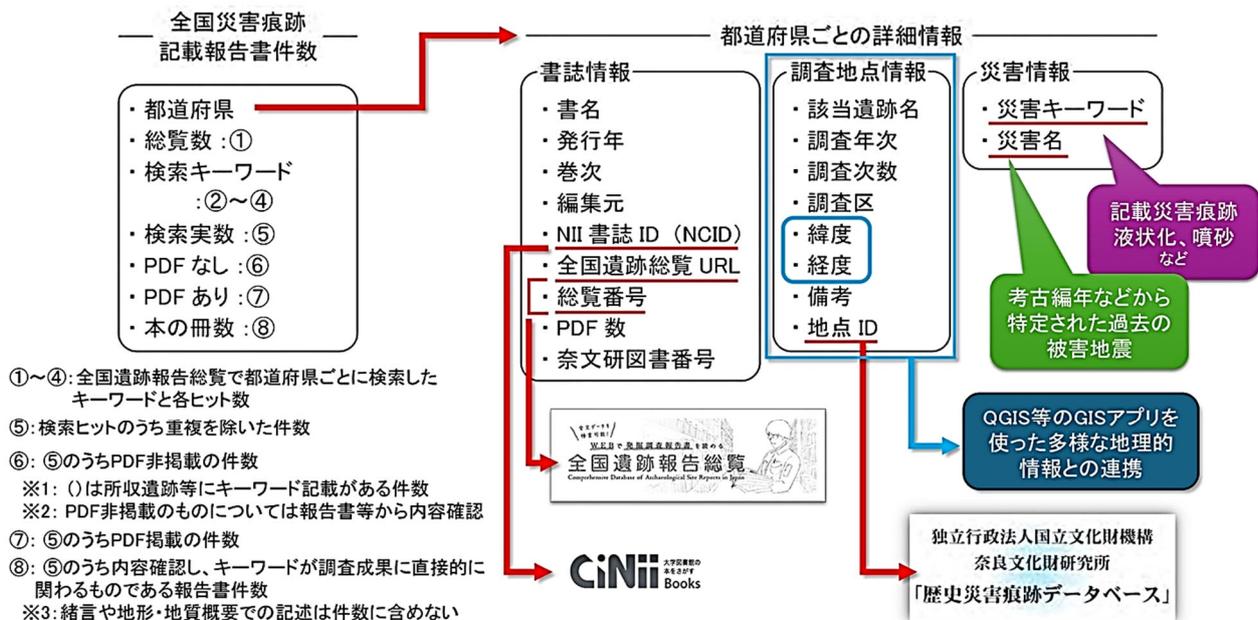


図2. 全国大規模地震痕跡データセットのモデル図（奈良文化財研究所[課題番号：NAB_01]）

「全国大規模地震痕跡データセット」が掲載する1レコードの項目，データリンクの解説。

